

## 特別寄稿

# 歩いてみませんか古のロマン 六十里越街道

六十里越街道保存推進委員会委員長  
月山志津温泉「変若水おちみづの湯つたや」社長  
志田 靖彦

六十里越街道というとなまず山形と庄内を結ぶ国道112号線を思い浮かべるのではないのでしょうか。初代県令三島通庸が試みたが実現せず、その後県によって、明治32～36年にかけてつくられた道路です。その後、昭和56年には高規格の月山道として供用され内陸と庄内を結ぶ大動脈となっています。

ところが、もう一つの六十里越街道が最近にわかに注目を集めています。きっかけは有志による発掘調査から始まったのですが、おりしも世界遺産登録へ向けた運動が拍車をかけました。私どもも志津温泉をブラッシュアップするために、六十里越街道をキーワードに美しい観光地造りに取り組んでいたこともあり、六十里越街道で隣の鶴岡市（旧朝日村）の人たちと連携したり、全国の街道会議のメンバーになったりと活動が急展開しました。

六十里越街道とは一体どんな街道だったのでしょうか。はるか古代より変わらないのが物流の道です。江戸時代には麻や青そなどが内陸から酒田北前船に運ばれ、船からは様々な物資が内陸に運ばれています。また、参勤交代でも歩かれています。何と云っても、最も歩かれたのが湯殿参りの人たちです。

出羽三山のひとつ、霊峰月山への地拝口は、古来より「八方七口」とよばれ多くの参拝者を集めておりました。（羽黒、肘折を除く）岩根沢、本道寺、大井沢（この二つは志津を通り玄海古道に至る）、七五三掛、大網の5口はすべて六十里越街道沿いに位置し、しかも、湯殿山に直接参詣出来るという好立地を備えていました。

江戸時代に入り、出羽三山の信仰の主体が湯殿山に移ったことで「湯殿参り」が全盛を迎えます。西のお伊勢、東の湯殿と言われ湯殿山のご縁年の丑年には15万人にも及ぶ参詣の人たちが、この



六十里越街道に立つ石塔

六十里越街道を歩いております。

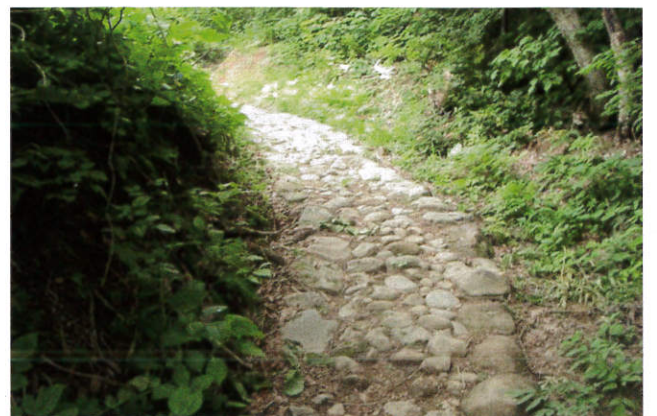
「湯殿参り」の経済的効果も相当なもので、出羽の国の総生産の3分の1に相当するといわれ、街道沿線の村々は恩恵に浴しており、志津村内の街道の石畳もこのような背景で整備されたもので、街道の石畳は、町の文化財の指定を受け保存活動が始まっております。

なぜこのように、東北は言うに及ばず広く関東からも出羽三山、湯殿参りに人を引きつけたのか少し触れてみたいと思います。

私たちは、山に祖霊が宿り、子孫を見守るという端山信仰と、山を生命の源とする自然崇拜とがあいまって、山に対する深い信仰心のごく自然に育まれてきたのではないのでしょうか。いわば、日本の精神文化の原点ともいえるものです。

「山川草木悉皆成仏」という自然崇拜の自然観。一木一草、小さな虫にも宇宙の根源の働きを宿すというような、命を尊ぶ精神世界が、近來の西洋合理主義的な、すべての自然は人間に奉仕するためにあるというような自然観に警鐘を鳴らしていると思います。

是非、古道「六十里越街道」を歩いてみてください。



西川町の文化財の指定を受けた街道の石畳